

2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

学校名	浜松市立北浜東小学校	氏名	笹ヶ瀬 菜生
-----	------------	----	--------

<「印象に残る写真2点」>

●写真1 [3651]

テレレの時間はかけがえのない時間

パラグアイで何度も目にしたテレレの時間。何か話し込むわけではないけれど、大切な人と時間を共有することで心がほっと温くなる。ちょっとしたことを話せて笑い合える、そんな時間の尊さを、忘れずにいたい。



●写真2 [1583]

自然との共生って？

シシリアさんの夢は、環境保全だ。自然とつながり、自然を大切に扱いながら生活する、それが自然と共生すること。真っすぐに前を見てそう語ってくれたシシリアさんの言葉が心に響いた。



1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は、世界で起きている事象を自分の目で見て知り、多面的に考えられるようになりたい、自分と関係のない遠い国の誰かではなく、自分と同じようにその国に生きる人がいることを子どもたちに知らせたい、という思いから研修に申し込んだ。パラグアイで実際に見て、話を聞き、思いを伝え合う中で、気付いたり考えたりしたことがたくさんあった。自分のもっていた価値観がぐらっと揺らぐ瞬間を何度も感じた。多様な見方や考え方があることを、どんな人との間でも大切にしていきたいと思った。パラグアイには、日本の文化や言語を守りながら暮らしている人がいる、強い使命感をもって働いている人がいる、いつも自然のことを考えている人々がいる、貧困に苦しむ人がいる、悩みながら学ぶ学生がいる、自由に思いっきり自己表現する子どもたちがいる。一般的にそのような人がいるという認識ではなく、顔の思い浮かぶ一人一人に出会うことができた。私は、学校の子どもたちに出会った人の表情や言葉を伝えたい。そして、交流したり一緒に考えたりすることを通して、世界を身近に感じ、関心をもって考えたり行動したりする力を育てていきたい。(笹ヶ瀬菜生)

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

出会ったパラグアイの人々はどの人もあたたかく、ユーモアたっぷりに私たちを迎えてくれた。言葉や表情

で、時には素敵な食事でもてなしてくれた。日曜日の移動中、車内から2時間ほど外を見ていると、様々な家が見え、家の前には椅子を丸く並べて家族や友人とテレレを飲みながら過ごす人々の姿がたくさんあった。相手を寛容な心で受け入れ、人と人との出会いやつながりを大切にすることがとても自然なことのように見えた。人と人とがしっかりとつながっていることをパラグアイで感じた。その関係性の豊かさは、安心感を生み、相手を大切にする原動力になるのではないかと思った。また、自然を大切にし、守りながら生活している人々に出会った。「自然と共存することは、自然を大切にすること」と話してくれたその人の姿からは、自然への感謝の気持ちが溢れていた。利便性や効率、利益を求め、自然を壊す担い手となっていないか、無関心や無知でいたくないと感じた。パラグアイに来て、受け入れられることの喜びを感じ、人や自然を大切にすることを学んだ。(笹ヶ瀬菜生)

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

地球の裏側であるパラグアイで、実際に日本人や日系人に会い、日系社会を見たときに不思議な思いであった。日本語を学び、日本文化や伝統を大切に生活している人が多くいること、想像を超える困難さに耐え、パラグアイの発展に寄与してきた日本人がいることを全く知らずにいたことに衝撃を受けた。ホームステイ先のパラグアイ人の家庭では、日本語は通じなかったが、散歩やドライブで、自分の職場や学校を案内してくれるときに日系人経営のレストランや野球コート、公園の鳥居を案内してくれた。日系社会の存在がごく当たり前で、とても自然な空気感であった。互いに認め合い共生していることが伝わってきた。パラグアイにとって日本はあまりに遠い国ではなく、近い国なのだと感じた。また、子どもたちの伸び伸びとした姿や人懐っこさ、一緒に遊び交流することで心を開いてくれること、相手を思いやる気持ちや歓迎してくれるところ、教師の教職に対する使命感など、交流して初めて分かる日本とパラグアイとの同一性があった。(笹ヶ瀬菜生)

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

パラグアイに来て感じたテレレを飲む豊かな時間や、人や自然とつながって生きる共生文化。日本の安全性や親切な人柄、豊かな自然や食文化の多様さなど、それぞれの国に良さがあり、未来に残したいものがある。一方で、スラム街、進学を諦める子ども、片親家庭、貧困の連鎖などの課題もある。失ってからでは遅いその国の良さを大切にしながら、多くの人が幸せを感じて生活できるような発展を模索することが求められていると分かった。パラグアイでは、豊富な水資源を今後も持続可能にするためのイグアス湖流域総合プロジェクトが行われている。日本でも、自然環境を守る取り組みをしている人はいる。しかし、それらの活動に関わる人だけが懸命に考えて活動するだけでは改善は難しい。一人一人が、自然と共生することの大切さに気付き、今より少しの不便さを受け入れる努力が必要なのではないかと思った。簡単に答えが出る問題ではないが、世界の国々の経験に学んだり、みんなで協力したりすること、自分の国だけに目を向けずに視野を広げることが大切だと感じた。そして、子どもたちと共に考えていく教育の担う役割の大きさを感じた。(笹ヶ瀬菜生)

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

ゴマの残留農薬プロジェクトのように、翻って日本国内の食の安全に関わることが、パラグアイのためにもなるという支援や、イグアス湖流域総合プロジェクトのように、現在問題が表面化している訳ではないが今ある世界一の水力発電というパラグアイの良さを今後も持続できるように予防するためのプロジェクトがあることに驚いた。支援とは、日本がしてあげるという上から目線のものでは決してなく、両国間にとってよいことや、世界全体にとってよいこと、つまり、世界の一員である日本にとっても重要なことであると知り、プロジェクトへ関わっている人の視野の広さに気付かされた。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

① JICA パラグアイ事務所ブリーフィング [笹ヶ瀬／安藤]

爽やかに素敵で JICA パラグアイ事務所の竹村雄一職員が、パラグアイの概要を、健康・安全面、地理、歴史、政治・経済の動向、JICA の事業に分けて説明してくれた。事前にあまり多くの情報を知れていなかった私にとって興味深い話ばかりであった。首都アスンシオンは、日本から二回経由しないと着けない一番遠い首都であり、現在 Take off 中で経済成長に街が追いつかず交通事故が多発していること。面積は日本の 1.1 倍、人口は約 700 万人（埼玉県ぐらい）、海がないため都市は川沿いに発展し、三つの都市を結んだ三角形の中に人口の 90%がいること。これまでに二つの大きな戦争があり、現在の社会構造に影響していること。そして、約 5,800 人の日系人社会が存在し、今年移住 80 周年であること。JICA からは技術協力、有償資金協力、無償資金協力の 3 スキームによる支援がされていることなど多岐にわたる。とても分かりやすく惹きつけられる竹村さんの話に全員感激し、あっという間の 1 時間半となった。その国を知る上で、地理や歴史、政治・経済について知ることの大切さを実感した。

(笹ヶ瀬菜生)

④ 地域と歩む学校づくり支援プロジェクト／コロネル・オビエド市教員養成校 [村田／笹ヶ瀬]

おらかな校長先生と事務局長に出迎えられて、まずは早速授業参観。情報の授業、エクセルでテスト結果の表を作成するという内容であった。教員との意見交換では、「きちんと計画することを大切にしている」と聞き、「日本も同じです」と声が挙がった。また、教員養成校が全国に一定数ある、奨学金制度がある、などの良さがある一方で、予算が足りずインフラが整わないことや教員の給料などに課題があることも聞くことができた。その後、校内で初のパラグアイ料理をいただいた。ジュースやデザートまでいただき、お腹いっぱい。午後は、校長先生が校内を案内してくれた。現在の生徒数は現職や管理職を含め 2,844 人！表向き教員養成校だが、新任研修や教育計画策定、夜学、専門研修など様々な機能を果たしているということを知り驚いた。そして、最後に「ここが教員養成校だけでなく大学レベルの資格も取れる学校にしたい」と夢を語ってくださり、「道中お気を付けて、人生幸せに、教師として成功あれ！」と優しい言葉とハグで見送ってくださった校長先生の笑顔が心に残った。(笹ヶ瀬菜生)

⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ [全員]

とうとうホームステイの日、緊張とうれしさ半々。両親と 3 人兄弟のご家族、スペイン語とグアラニー語での会話だ。私たちの下手なスペイン語の単語から行間をよんで理解してくれたり、身振り手振りで何とか伝えようとしてくれたりした。家族全員で食べた昼食は、とても心あたたまる時間だった。お父さんが朝から焼いてくれたお肉、お母さんお手製の Pasta がおいしかっただけでなく、心からのおもてなしとみんなの笑顔に胸がいっぱいになった。その後も、庭でゆったりとテレレを飲みながら過ごした時間はほっとする優しい時間で、忙しさに忘れてしまっていた時間だった。言葉は分からなくても、伝えることを諦めずに、伝えたいという思いをもって伝えようとするれば、気持ちは伝わると知った。こちらが笑顔でいると、相手も笑ってくれた。見知らぬ日本人を招いてくれて、帰り際目を赤くして送ってくれたお父さんや、「私の娘」と言ってくれたお母さん、自分の時間も大切だろうにずっと一緒に過ごして笑っていてくれた兄弟がいた。ありがとうの思いを精一杯伝えた。ホームステイができて、カバジェロ・ベルナルダさん家族に出会えて本当によかった。幸せもらった。(笹ヶ瀬菜生)

⑭ 小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクト [油浅／笹ヶ瀬]

日本は世界有数のゴマ消費国であり、そのほとんどを輸入している。パラグアイで生産されたゴマの 6~7 割は日本に輸出されるゴマだ。ゴマ栽培における残留農薬の問題を解決することは、パラグアイの小規模農家

の貧困対策に重要であるという。しかし、プロジェクトリーダー滝本浩志さんのお話の中で最も印象に残ったのは、単にパラグアイの貧困対策だけではなく、生産国でゴマの安全性を高めるということがひいては日本国民の食の安全、健康に大きく寄与するということである。支援とは決して一方的なものではないことを再認識した。滝本さんの言葉から、その実現のためには理論立てて考えるための知識や技術、それを様々な人に伝える力が大切であると感じた。パラグアイ国内では、農薬管理のルールがなく食の安全に関する国民のニーズもまだ低い、今後の国際競争を生き抜くためには安全性が重要になってくるそうだ。私たち自身も、自分たちが日本で食べているものが、どの国でどのように作られているのかをもっと知る必要があると感じた。

(笹ヶ瀬菜生)

⑩ 在パラグアイ日本大使館 [笹ヶ瀬／油浅]

大使館表敬では、パラグアイで印象に残っていることを1人ずつ話すこととなっていた。パラグアイに来て初めてブレザーを着て、在パラグアイ日本大使館へ。JICA 東北チームと合流後、大使館の門をくぐった。それぞれが一晩かけて考えてきたことを、緊張しながらも自分の言葉で伝えることができた。上田善久パラグアイ共和国駐節特命全権大使は、一人一人の顔を見ながら、丁寧に話を聞いてくださった。また、JICA 東北のメンバーとは、訪問場所や感じたこと考えたことが異なり、話を聞くことで新たな見方や考え方を知ることができた。大使館には茶室や松の木があり、日本庭園の池にはコイが泳いでいた。一方で、マンゴーの木があり、パラグアイの伝統工芸ニャンドゥティが飾られ、日本とパラグアイどちらの自然や文化も大切にされていた。日本ではあまり知られていないが、パラグアイと日本には深いつながりがあること、そして、パラグアイで得た経験を、日本で多くの人に伝えてほしい、という上田大使のお言葉をしっかりと実行していきたいと思う。

(笹ヶ瀬菜生)

● パラグアイでの食事全般 [笹ヶ瀬／児玉]

パラグアイで食べた食事約26回の内訳を振り返ると、日本食11回、パラグアイ料理11回、洋食4回であった。パラグアイ到着後、初の朝食はホテルでの日本食ビュッフェであり、全員が驚いた。まさか、地球の反対側で日本食を食べられるとは思っていなかった。しかし、それは序の口であった。てんぷらうどん、すき焼き、やきそば、ラーメン、納豆、漬物、白米、味噌汁、煮物…これぞ日本食というものをつくさん食べた。初めは驚いていたが、徐々にこれがパラグアイの文化の一つなのだと感じるようになってきた。パラグアイでは日系社会が共存し、日本食の伝統も守られてきたのだと思った。

一方、パラグアイ料理では、アサード(焼肉)のおいしさに目から鱗であった。肉に岩塩を振りかけ、炭火焼にしたものだ。主食はチパというチーズ入りのパン、キャッサバ、トウモロコシを使って作られるソパパラグアージャなどである。おいしくいただいた。野菜はあまり食べられてこなかったそうで、その分のミネラルやビタミンは、常に飲むマテ茶で賄われてきたという。茶器セットと水筒はどこへ行くにも必携だ。冷水で入れたお茶は特にテレレと言い、このお茶の文化はパラグアイを語る上で欠かせないと感じた。(笹ヶ瀬菜生)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

- ・お土産は、大まかに個数により大(団体用)、中(専門家用)、そして小(青年海外協力隊用)の3種類とした。大中はすべて同じ物(チョコクッキー…どこの国のお菓子かよく見る)、青年海外協力隊用は海外にいたら食べたくなりそうなものをスーパーで買い、ばらして詰め合わせにした。買うときや精算が楽だったり、パラグアイにいるときに毎日どれを渡すかで困らなかつたりしてよかった。今回予備で1つずつは多めに持って行ったが、それでちょうどよかった。
- ・通訳さん、運転手さんのお土産もあるとよい(感謝の気持ちで渡したくなる)。現地で物を購入することもできるが、今回は日本の物を渡すことができ喜ばれた。

- ・日本へのおみやげは、どのくらい買うか、ある程度頭でイメージしておき、あまり迷わずにどんどん買う。悩んでいる時間はあまりない。次のところでもあるだろうと思わずに。
- ・事前準備（持ち物や質問事項など以外に）をどこまでやるか、とても焦るし、成績の時期に準備することになるため大変。帰ってきてからも交流できることも考えながら、あせってやみくもにやるのではなく、狙いをもってやらないと、結局使わずに終わってしまうことがあると感じた。
- ・日本の学校紹介など用意したものは、クリアファイルに入れて作ったり、1枚ずつラミネートしたりそれぞれ違ったが、何十人と交流するときには一冊になっているよりも、何枚かに分けられ、交換して見られる方が役立った。
- ・日本の子どもたちからのお土産を持っていく場合は、どこで渡すかを想定し、なるべく同じようなものにしておくと、渡すときにスムーズに渡せる。例) 小学校低学年のクラス全員に等に渡す場合、折り紙の手裏剣やカエルでそろえるなど。時間がなくて、選ぶのに時間がかかったり、揉めたりすることも…（渡し方次第だが）。
- ・飛行機ではマスク、スリッパがあると便利。個人的には必需品。行きの飛行機は冷房がきいていて寒く、ダウン（小さく収納できるもの）が大活躍だった。
- ・ホームステイ先では、日本語と英語が通じなかったため、旅行ガイドブックの使えるフレーズはすべて使うぐらいの勢いでガイドブックを活用した。身振り手振りや拙いスペイン語で通じた喜びは大きいですが、もっともっと交流し話したかったので、スペイン語辞書を持っておけばよかったと後悔した。
- ・ホームステイ先では、折り紙やけん玉、紙風船などで交流したり、写真や動画を見せ合ったりした。その際、写真も良いが、動画だとより伝わりやすいように感じた。何気ない日本の日常や町の様子、文化や伝統などを撮りためておくとも良いかも。
- ・名刺は、表が英語、裏は日本語で50枚ほど作成した。自分の顔写真を入れておくと好評であった。
- ・交流では、じゃんけん列車（小学生と）やはじめの一步（高校生と）など体を動かして一緒に遊び触れ合うことで、距離がとて近くなると実感した。インタビューや意見交流などもしたいが、一緒に遊び交流する時間も大切。
- ・事前に、どこでどのような質問をするか、どんな写真やビデオを撮りたいか、みんなで考えてリストを作っておくと、共通理解ができてよかった。ただし、それを作る際に、帰国後どう使うかまで想像しながら話し合わないで、結構時間がかかってしまう。また、リストはあるものの、その時々に合わせて柔軟に質問したり対応したりし、答えてくれたこと背景や原因などをさらに尋ねることでより深く知れるように感じた。決して私たちがやりたい事ばかりを求めすぎないことが必要。
- ・日本人会では、自分が知らなさすぎたり、想像しきれなかったりして、どこまで質問していいのか悩みまく尋ねられなかった。日本で知ることができる情報や調べられることは、知っておけばよかったと痛感した。その上で、現地で見えたものや感じたことを大切にす。

6. その他全般を通じての感想・意見など

帰国して改めて感じることは、今回参加することができたのは、たくさんの人の支えや熱意、心遣いがあったからだということだ。JICA 中部やNIED・国際理解教育センターの方々を始め、所属校の先生方、チームパラグアイのみんな、そして、パラグアイで出会った方々…。私たちがあたたかく、熱意を持って受け入れてくださったパラグアイ事務所の所長や竹村さんの、「子どもたちに伝えるにあたり、みなさんにとって必要なことのできることは何でもさせてください。無理をさせてください。」という言葉に胸が熱くなった。

子どもたちを育てる仕事をしている私たちが、このような経験をすることができるというのも大変貴重だと感じた。だが、このような研修があることを知らない人も多い。同僚や教師仲間に伝えたところ、参加したいという声がたくさん挙がった。自分の目の前の子どもだけではなく、友達や家族、知人…これから出会う様々

な人に、今回の経験や学びを伝え一緒に考え続けていきたいと思った。

出会ったみなさんに、このような経験ができたことに、心より感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

以上